

論文

魅力ある教育環境を求めて

— 新園舎、オープンスペース幼稚園での試み —

五十嵐敦子・柳 雅人・目良佐都美

Seeking For The Attractive Educational Environment

—A Practical Education In The Open Space Kindergarten—

IGARASHI Atsuko

YANAGI Masato

MERA Satomi

Abstract

Meihou new kindergarten building was constructed in May 2009. The constructional concept of this new building is open space classrooms including an all-purpose space playroom.

The first chapter discusses the history and meaningfulness of the open space education to insure the freedom of children and build the relationship with mix-aged groups. The second chapter discusses the constructional design of an open space kindergarten. The third chapter discusses the work of a teacher and children's growth in the open space education.

はじめに

北海道旭川市の春光地区の閑静な住宅地、公立小学校の隣接地に、1971年、学校法人立めいほう幼稚園が誕生した。大正生まれで終戦前に五年間の小学校教諭の経験を持つ寶田由和子が初代園長に就任し、その夫喜一郎が理事長となりまさに二人三脚で、私立幼稚園を創設した。五年間勤めた初代園長が引退した後も、地域の幼稚園として、また、自衛隊の官舎や教員住宅が近くにあつて、保護者の多くが公務員であり、教育に熱心な保護者の協力を得ながら、幼稚園は発展、成長してきた。

北海道の道北地区に位置する旭川の地域性を生かした教育方法や活動内容、たとえば1994年に完成した室内温水プールでのプール活動、歩くスキーや雪上サッカーなどの特色ある保育を実践してきた。これは、この時期の園長が体育科教員であったことで、園児たちを直接指導できたという好環境によるものであった。プール指導に関しては全教諭が担当できるように研修を積極的に受け、技術を身に付けた。また、創立以来40年間にわたり、「歩くことは健康な身体作りの基本」という教育方針に基づき、姉妹園であるわかば幼稚園（緑が丘地区）とともに徒歩通園を実施している。現在、市内の私立幼稚園31園中で、徒歩通園を実施している唯一の幼稚園となっている。また、新しい時代の要請や保護者のニーズに応えることも必要であり、幼稚園アンケートの結果を考慮して、週2回の給食（外注）という新しいシステムも積極的に取り入れている。

しかしながら、園舎の老朽化と少子化による園児減少に伴い、「より魅力的な幼稚園にするために」園舎新築の計画が持ち上がり、理事会の決定を受けて、2009年3月にオープンスペースを持つ新しい園舎が完成した。

明るく開放的な新園舎が完成したことで、ハード面での充実はいうまでもないことであるが、ソフト面での充実、すなわち子どもの個性や自由を保障できる教育方法や保育内容をより一層充実していくことが期待される。ハード面での充実がソフト面での充実と一致していくことが不可欠で

ある。教育方法や保育内容の充実を担う教師は、まさにソフト面での充実を常に自分自身の目標としながら教育実践に取り組んでいる毎日である。

本論文の構成は、3名による分担執筆である。第1章は、五十嵐が担当し、第2章は、新園舎の設計を担当した柳雅人建築設計工房を主宰する柳が担当し、第3章は、めいほう幼稚園で30年間の教諭としてのキャリアを積み、2010年4月から園長に就任した目良が担当した。

I. オープンスペースを持つ学校の意義

— ハード面とソフト面の統合 —

五十嵐敦子

1. オープンエデュケーションの歴史

1960年代のアメリカでは、未来を志向する学校建築の研究が進み、今までのような「画一的な教室の集合」ではなく、普通教室も可動式の間仕切りでいろいろな用途に使用できるように固定化しない教室空間となったのである。日本においてもその研究の影響を受けて新しいタイプの学校建築が広がるとともに、ソフト面、つまり教育方法にも変化をもたらした。

「オープンスペース」を持つ学校あるいはオープンスクールは、いろいろな観点から、「学校の仕組みを融通性あるもの」¹にするというコンセプト（概念）を持っている。

『教育の方法と技術』（多田俊文編、学芸図書）において、オープンスクールの教育方法上の特徴がいくつか挙げられている。第一に、自分でやりたい活動を選択する配慮をする。第二に、いろいろな子どもたちによる異質な集団を作り、相互に学び合うようにする。第三に、子どもの興味や技能をさらに伸ばすように指導する、などである。つまり、空間的のみならず、時間割も融通性のあるものにする。さらに、学校と地域との連携を重視し、閉鎖的といわれてきた学校を地域に開かれた場所にするということである。「学校支援ボランティア」を募集し、多くの人たちに学校を見

てもらうことが新しい試みである。ⁱⁱ

「個性化教育」研究の第一人者である元上智大学教授の加藤幸次によれば、1980年代は、我が国の学校史における「量の教育」から「質の教育」への大きな転換期となった注目すべき時代だとしている。すなわち、教育も一クラス50人という大量生産の時代から生徒一人ひとりの個性を育てる「個を重視する」時代へと動き出したのである。そういう教育観に重なるように、学校建築というハード面においても「オープンスペース」を持った学校が、2校が開校された1973年を皮切りに急速に増加した。その後の1978年には、加藤教授の全面的な指導を受けて全面改築を行いオープンスクールとしてスタートした、愛知県東浦町立緒川小学校は、現在も「個性化教育」の拠点として有名である。

2007年11月には、緒川小学校での「オープン・スクール30周年記念自主研究会」が開催され、筆者も参加した。大ホールでのオープンタイムの公開授業は、印象深いものだった。「オープンタイム」は、『学校はパラダイス』（現代書館）を著した小笠原和彦によれば、90分間クラス（ブロックと呼んでいる）で、3年生以上の児童が自分で教科の枠を越えて自由に学習計画を立て学習活動を進めていくことが保障される時間であるという。また、この時間には、町のボランティア保護者や地域住民が先生役となって様々な学習を支援する多くの大人たちが学校を訪れて子どもたちと触れ合う機会を持つ。ⁱⁱⁱ

オープン・スクールつまり、「多目的スペース」を持った学校に対して、1984年以降、文部科学省が国庫補助金を出すことになり、2007年現在小・中学校合わせて約5000校に及び普及しているという。

オープンスペースを持つ学校の源流は、イギリスにおける「インフォーマルエデュケーション（Informal education）」さらにその概念がアメリカに渡ると、「オープンエデュケーション（Open education）」と呼ばれるようになり、日本では、「個性化教育」として普及されることとなった。この点に関しては、加藤幸次・高浦勝義共著『個性化教育の創造』（明治図

書)に詳しく記述されているので、ここでは、触れるだけに止めたい。

「オープン教育」を明確に定義するのは難しいのと同時に前者と「オープン・スペース」との用語上の混同が見られることが、平野朝久らによる共著論文「オープン教育における教師の子ども観、学習観、知識観の検討」の中で指摘されている。平野らも述べているように、オープン・スペースを持つ学校の特徴として、まず第一に教室間の壁をなくし、カーペット敷きの床、多目的スペースがあり、ガラス越しにお互いの教室が見渡せるし、見られている状況であることを挙げるができる。^{iv}しかしながら、平野らは、次のように指摘している。「オープン・スペースをもっているという理由だけで、オープン教育を実践している学校とはみなさない」^vと。

結論として、平野らは、スティーブンス (Stephens, L.) によるオープン教育の定義が適切であると考え、次の文章を引用している。「オープン教育は、クラス全体に教えることを最低限にし、子どもたちが個人の興味を追及し、活発に教材に取り組み、彼ら自身がその学習の多くの面を自分で行なうように任されている、といった教室環境によって特色づけられる」^{vi}と定義する。

2. オープン教育 (オープン・エデュケーション、Open Education を以下「オープン教育」とする) の定義

アメリカのニューヨーク州立大学教育学部教授であつたりリアン・スティーブンス (Lillian Stephens) は、オープン教育に関心を持ったきっかけが、1960年末イギリスのインフォーマル・スクールの初期の報告書 (一般的に1967年の『プラウデン報告書』^{vii}とされている) を見たことであつたと述べている。実際にイギリスの学校におけるインフォーマル教育の実践状況を調査しながら、アメリカ社会に適應できるアメリカ方式を実践すべく、アメリカでのオープン教育運動の発展に大きく寄与することになったのである。イギリスでの報告書は、このオープン教育運動を進めていく

上で参考程度にしか過ぎなかったことから、彼女は、教師のためのオープン教育の実践的な手引き書を書く必要性を感じ、1974年『オープン・エデュケーションへの教師用ガイド、Teacher's Guide To Open Education』

(21世紀教育の会監修・武井優里訳『オープン・エデュケーションの手引』明治図書、1979)を出版した。日本語訳の序文において、著書の目的をスティーブンスは次のように明確に述べている。

「この本は教師のために書いたものであるが、同時に、学生、指導者、両親、それからオープン・エデュケーションの理論や実践に興味のあるすべての人に読んでもらいたいと思っている。この本は実践に重きを置いている。というのは、結論的に教育理論は、教育上の実際問題というような実践の場において、一番明確になるからである。・・・(筆者、略)・・・アメリカとイギリスの両国で試行され、有益であることが立証された多くに方法や考え方が示されている。教師は自らの状態に一番適当なものを選ぶであろう。」^{ix} 著書の中で、教師が実践の場において応用できる具体的カリキュラムなどの紹介があるが、一方で「オープン教育」の定義を、他の教育運動、たとえば進歩主義教育、自由学校運動やイギリスでのインフォーマル教育運動と比較しながら、オープン教育との明確な差異を浮き彫りにすることで、理論的に一層明確にしようと試みているのである。^{ix}

3. オープン教育における方法論—コーナー学習(遊び)—

「一斉指導」「教師中心主義」という伝統的な指導方法や伝統的な指導観から脱却するためには、まず、今までの教室における椅子や机、教材などの室内配置を変える必要があるという、スティーブンスの指摘がある。

オープン・クラス(筆者は、オープンスペースと同義と捉えている)に変えるための室内整備には、二つのことが必要であると、彼女は提案している。

第一に、1人ひとりの1人机は使用せず、グループで使う大きなテーブ

ルを用意する。しかし机のない部屋で、整理整頓を保つには、子どもの持ち物や道具類を収納するための整理棚が必要となる。^x次に必要となることは、それぞれの学習（遊び）に応じて部屋にコーナーを設けることである。小学校段階でのコーナーは、読み書き算数のコーナーなどが必要となるであろう。幼稚園や保育所でのコーナーは、絵本コーナー、劇遊び（変身）コーナー、料理コーナー、ままごと遊びコーナーなどが考えられる。コーナー設置の利点は、二つ挙げられる。一つは、自分の興味のある活動に集中して取り組むことができること、さらに「異なった活動が同時に進行できる」^{xi}ことである。しかも、活動のコーナーは、固定化したものであってはならず、常に子どもが今興味を持っている活動に関心をもちながら新しいコーナーの計画を立てる必要がある。「オープン・クラスでは子ども達が興味を感じた問題を教師の指導の下に自分で調査研究するいわば、実験室であるから、そのような目的に合うように十分注意深く計画されなければならない」^{xii}という、スティーブンスの言葉は傾聴するに値する。

オープン教育の普及の契機は、1960年代のイギリスの中央教育審議会の報告書だとされているが、英国においても、米国及び日本においても、以前から同様な教育実践や研究が行われていて、それが下地にあったことは言うまでもないことである。^{xiii}

特に、日本における大正時代の自由教育の実践は、現代のオープン教育の考え方に共通するものがあったと考えられる。オープン教育実践校の先駆けとして、平野朝久らの研究グループは、北海道札幌市立丘珠小学校を紹介している。^{xiv}しかしながら、この学校での実践は、英国や米国からオープン教育を導入した結果ではなく、「当初、読書指導の改善に取り組み、その経験を基に、更に改革していこうとしていた時に、同様な方向を目指している外国のオープン教育のことを知ったのである。その後それを参照しながらも丘珠小学校独自の実践をしてきた」^{xv}という背景があることは興味深い。先述した愛知県東浦町立緒川小学校での実践のスタートは、確

かにアメリカ留学を経験した加藤教授の指導が契機であったわけだが、その後は、地域性に根差した学校独自のオープン教育の実践を積み重ねている。

4. おわりに

オープンスペースをコンセプトにして建築された小、中学校は、相当数になっているという。しかしながら、幼稚園や保育所の幼児教育レベルでは、5000という数には到底及ばないであろうと想像する。同じ結果が、過去に発表された論文数にも表れているといえる。義務教育段階における「オープン教育」に関する論文は、幾つか発表されている。代表的な論文として、1987年、東京学芸大学紀要に発表された、平野朝久らによる共著論文『オープン教育における教師の子ども観、学習観、知識観の検討』や1996年、秋田大学教育学部研究紀要に発表された、佐藤真・藤田輝夫共著論文『日本のオープン教育における環境の位置—全国個性化教育研究連盟の理論と実践を手がかりとして—』を紹介したい。後者の論文は、環境に焦点を当て、教育方法との関連でオープン教育を論じている。此の論文で、佐藤らは、オープン教育での環境とは、「児童の問題意識を刺激する批判的な環境である」と述べている。したがって、教師の役割は、児童（子ども）が探究や問題解決的学習が可能な環境構成を工夫することであるとしている。建築学の論文では、『日建設計—ひと・環境・建築』（新建築2006年3月別冊）に発表された、「瀬戸市立 品野台小学校、『オープン教育』を実現させる平屋の校舎」を紹介したい。設計士、若林亮のコメントが興味深い。以下は、設計士からのメッセージの抜粋である。

「低学年の児童が高学年生を見ながら成長する」「児童と先生が垣根なく触れ合う」といった、学校全体の一体感を育む環境が大切と考え、「児童と児童」「児童と先生」が「多目的スペース」と呼ばれるひとつの広場を囲む、いつも互いの姿を見ながら生活ができ、すべての普通教室（8教

室)が間仕切りなくオープンに面し、さらに職員室もガラス越しに「多目的スペース」に面するオープンスクールとした。

また、最後に日本建築学会大会学術講演梗概集において、昭和59年(関東大会)と昭和60年(東海大会)で発表された二つの研究が、唯一「オープン教育幼稚園」をテーマにしたものである。両者とも、建築学会で発表された、幼児教育空間に関する研究の一連の研究である。

オープンスペースのある環境での保育、あるいはオープン教育の実践における利点として、子どもが遊びたいことや興味あることを自分で選択できる自由があること、空間的な自由は、子どもの行動や移動する自由を可能にし、それによって異年齢間の交流を自然に生むことに繋がり、さらに様々な人間関係を築く基礎を、子どもたちが養うことができる、という二点を挙げるができる。

しかしながら、その利点や効果も、子どもの遊びや活動を上手く誘導したり、刺激したりしながら展開していくためには、教師の支援が必要であり、適時に適当に支援ができる教師の力量が当然問われることになる。すなわち、教師の力量とは、Ⅲ章で目良が指摘しているように、「教師の保育に対する姿勢が見えない」実践をしているようでは、進歩がないということ、他の教師の教育方法にも目を向け、常に「自己中心的な保育をしていないか」を反省し、他の教師との話し合いを通じて、自分の保育を見直すことを実行できる能力といえる。

教師の力量や日々の努力が、魅力的な教育環境をさらに充実した環境へと導くことになることは、明確であり、今後の課題として、利点を生かす保育の展開を、現場の教師に期待したい。引き続き、オープンスペースの園舎が与えた子どもたちの成長や育ちについて、実践的研究を継続していきたい。

注

- i 加藤幸次・高浦勝義共著『個性化教育の創造』明治図書、1987
多田俊文編『教育の方法と技術』学芸図書、1991、p.129
- ii 多田俊文編、前掲書、p.45~6、p.129~33
- iii 愛知県東浦町立緒川小学校創立30周年記念誌参照
- iv 平野朝久他共著論文「オープン教育における教師の子ども観、学習観、知識観の検討」東京学芸大学紀要、第一部門、教育科学、38、昭和62年 p.40
- v 同上、p.40
- vi 同上、p.41、スティーブンス著、武井優里訳『オープン・エデュケーションの手引』明治図書、1979、p.42
- vii 1963年、イギリスの文部大臣は、中教審に対して「初等教育のすべての側面と中等教育への移行について考察すること」を諮問し、1966年に調査・報告した答申を、審議会委員長の名前を冠して「プラウデン報告書」とも呼ばれている。答申の内容は、11歳試験の廃止、能力別学級編成の廃止などの勧告を含んでいる。
- viii スティーブンス著、前掲書、序文4
- ix 同上、p.44
- x 同上、p.83~5
- xi 同上、p.86
- xii 同上、p.98
- xiii 平野朝久他共著、前掲論文、p.39
- xiv 同上、p.40
- xv 同上、p.40

Ⅱ. オープンスペース導入への設計手法

柳 雅人

1. 現状と課題

既存建物は開園後37年が経過し、土地の買い増しに伴う増築工事を幾度か繰り返して行ってきたこともあり、機能性が現状のニーズに必ずしも合ったものでないことと共に、耐震性、耐久性、落雪や漏水の問題など解決しなくてはいけないハード面の課題も数多く抱えていた。

今回のプロジェクトを進めるにあたり、既存建物の改修工事をはじめとする増築工事を含めた環境整備や、別の敷地を取得しての新築及び現地での改築計画など、様々な角度より検討する必要に迫られた。

敷地周辺には、公立小学校や彫刻美術館、井上靖文学記念館、地区公園などが隣接、閑静で落ち着いた環境に包まれ文化的な街並みが形成されている。その背後には公営住宅や戸建て住宅が建ち並び、旧第七師団の旭川駐屯地が近いということもあり、公務員の家庭が多く比較的子供たちの歓声が多く聞こえる地域でもある。

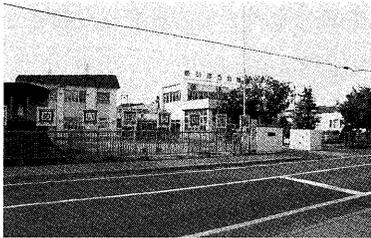
当園の教育方針の基本は、自分の足で歩いて通園することをモットーとし送迎バスがないこともあり、その多くは自力での通園を実施している。人としての基本的な精神を大切にしており、毎日、家と園との行き来により体力の向上や自立心を自然に養うことができ、周辺環境の豊かさや優しさも子供たちの心を後押ししてくれているのではないかと感じる。

しかし、今後は周辺地域における都市的環境の変化などにより、子供の数も不安定な状況になる可能性も考えられるため、いかに魅力ある教育プログラムを確立させていくのか、さらに環境面をより充実させることにより、市内全域を対象に開かれた教育現場を目指していくことが、園の運営に対し大きく影響することは明らかである。

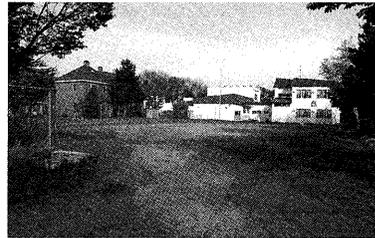
基本方針を検討するに当たり、最初に既存建物を十分調査することにより、大きな問題としてあげられている耐震性能の安全性を考慮しつつ増築する方向性をさぐることにより、経済的な負担を低減することが可能かど

うかを検討することからスタートした。

しかし予想以上に構造的改修部分への予算負担が大きくなることが判明、今後、解決することが難しい少子化問題を視野に入れ中長期的な教育におけるビジョンを確固たるものとし、より一層地域に根ざした教育環境づくりを目指すためには、既存施設を運営しながら現地での改築計画を選択することが、今回のプロジェクトを成功させるためにはベストであるという最終結論に至った。



昭和47年に建設



北側グラウンドからの全景

2. 基本計画

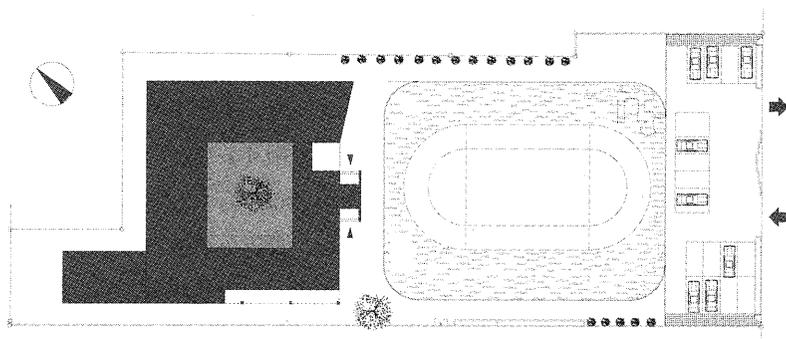
敷地の形状は、先にも触れたように開園後幾度かの土地取得により建物の裏側に伸び、間口に対し奥行きがかなり深く建物背面（北側）に位置しているグラウンドは寂しく、運動会以外はあまり利用されていないような印象を受けた。また、建物前面側には当園の教育プログラムの大きな特徴でもある水泳教室を行う増築したプールにより駐車場の確保も難しい状況にあり、隣接する小学校への通学路である前面道路にたいする車の出入りが子供たちの安全性を脅かしていた。

既存建物を運営しながらの改築計画であるため、北側に位置する既存グラウンドに新園舎を配置し、完成後に引っ越し、その後既存建物を解体した後に新規グラウンドを整備するという基本方針は必然性の中から生まれた。

今回のプロジェクトを通し、まず筆者が最初に思い描いたことは、安全

でかつ安心な空間の中で、子どもたちと先生、保護者の笑い声や歓声が園全体に響き渡り、一つの大きな家族であり兄弟であるかのような親密性を築くことである。また毎日の園生活に動きがあり、可能性を秘めた子どもたちの個性一つ一つがはじけ飛ぶような空間を創りあげたいと考えた。特に北国の冬は長く厳しい気象条件にあるため、どうしても室内での遊びが多くなることは避けられないのが現状であり、最近の子供たちは特にその傾向が強いように感じられる。子供たちは遊びの天才ではあるが、内部の空間にだけとらわれてしまい、保育室が中心で閉鎖的かつ限られた環境の中で、画一化された指導が中心に時間が経過してしまうことは、子供たちの才能や可能性が失われていってしまう。したがって限られた条件の中、四季を通し、その季節の風を感じ、陽の光を感じ、雨の匂いを感じ、きらきらと輝く空気のある存在を感じながら、子供たちが優しく豊かな心を育ていくことができるような空間を創り上げるのが課題であると考えた。

敷地の形状や周辺環境を考えると、園舎機能の中核である保育室をどのように配置し、遊戯室や職員室など他の機能性とどのように結び付けていくのが重要なポイントになる。敷地条件が満たされているのであれば平屋建てとし、保育室は全て非難階、即ち地面に接し土との関わりを持たせることが幼児教育の理想と考える。しかし残念ながら今回の計画は、敷地の大きさ、形状もさることながら、最初にも触れたように、既存の園舎を利用しながらの改築工事のため、2階建てでの計画が実行されることになった。



配置図

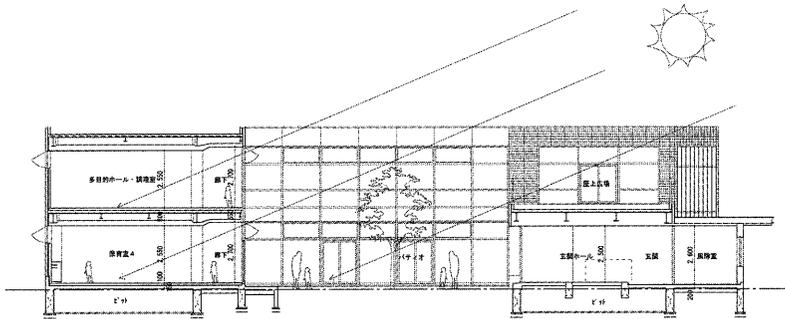
3. オープンスペースへの基本的なアプローチ

そこで第一に考えなくてはならないことは、採光をどのように考えたら良いのかである。最も基本的な考え方として、南側にバルコニーを設けグラウンドや園庭に面して直線的に保育室を並べてしまうことが、外部との関係も保ちつつ明るい環境を整備することが可能となる。しかし今回のプロジェクトは、既存の園舎を利用しながらの計画であり、残されている敷地のボリュームを考えると物理的に非常に難しいことは明白であった。そこでパティオ（中庭）を核とした内部のような外部空間を含めた領域を教育活動範囲と考え、このパティオに面し南側に大きく開いた回遊できるオープンスペースを巡らせることにより採光を確保し、保育室を関連付けさせることとした。回遊できることは子どもたちの行動範囲を無限に広め、自分たちにとって居心地の良い場所を探求できる楽しい空間となると筆者は考えた。

このオープンスペースは1階から2階へと立体的にもつながりを持たせているため、子供たちの遊び心をより増幅させ行動範囲を広げさせる。廊下と保育室の壁を排除しオープンクラスを採用することで内外の一体感をより一層高め、開放的で安全な空間を確保できるのではないかと考えた。

北海道の長く厳しい寒さの冬期間において、パティオに面する壁面をガラススクリーンにすることにより熱損出の影響が大きいと心配されるが、

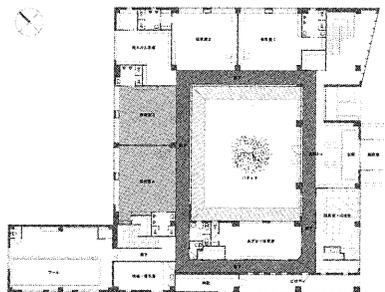
ガラスの性能（ペアガラス LOW-E）を上げることにより暖房負荷の軽減を図ると共に、太陽エネルギーの取得熱を十分確保することにより、暖房のランニングコストを抑え、昼間は自然光を主体として保育室の照度を確保できるため、照明の点灯を部分的に間引くことなど工夫することにより、電気代の削減や蛍光管の長寿命化などにも配慮した。



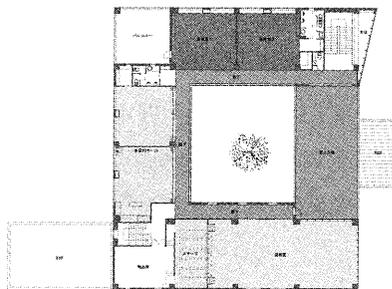
断面計画（光の取り入れ方）

したがって、1階保育室の奥まで自然光が届くよう配慮するためには、管理ゾーン（北側）の高さを抑えパティオに面したオープンスペースのサッシ高を検討する必要がある。また、大きくなったガラス面は外気温との温度差により生じる結露対策として、フリーアクセスフロアの床下空間に温風を通し、サッシ際の床グリルよりガラス面へ上昇させることによりコールドドラフト¹を抑え結露を防止する工夫を施した。

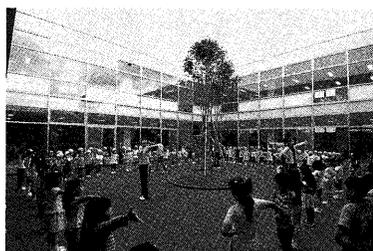
パティオは子どもたちの行動を安全で自由かつ開放的にさせ、内と外を繋ぐ空間として子供たちの遊び心に刺激を与えてくれるメリットがある。職員室からは園内外における子ども達の行動の安全を管理し易く位置を工夫することで、子どもが自由に遊びながら学ぶ姿を見守ることが可能になった。



1階平面図



2階平面図



パティオ

4. オープンスペースと幼児教育

建築計画における必然性や技術的な視点から導き出した保育室のあり方が、オープンスペースを導入し、パティオという中間領域を含め各保育室が有機的に結び付いている空間構成が、子どもたち、教育環境、維持管理面など様々な視点においてメリットが多いことに気がついた。

今回の計画では、ただ単に廊下との間仕切り壁を取り払っただけでオープンスペースとして投げかけたわけではなく、内部的な要素を持ち合わせた外部空間のパティオをコアとして、オープンスペースから保育室へと連続性を持たせることで、子どもたちが自分のクラスだけにとどまらず外と内、内と内を自由に行き来し活動することで、異年齢クラスや同年齢の別のクラスの子、さまざまな教職員とふれあいながら人間関係を構築してい

き、自然な形で他者への思いやりや協調性を身につけることができると考えられる。また、遊ぶことに対し一人ひとりが、やりたいことを自分自身で選び、工夫し、発展させていくことで自発性や想像力を養い、幼児期において一つの社会性を自然に身につけることができるのではないだろうか。

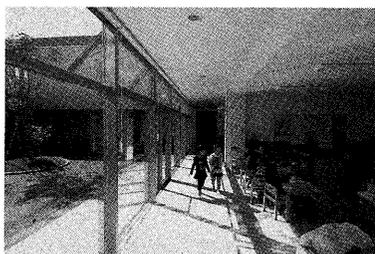
自由に遊びながら学ぶオープンスペースシステムを導入するためには、守らなくてはいけない幾つかのルールがあることを子供たちには理解してもらう必要がある。時間の経過に伴って子供たちがある程度環境に順応することは考えられるが、教育の側面からみると非常に難しいことは予想できる。時間がかかることは十分に予測されることではあるが、オープンスペースシステムの規律を身につけた子どもたちは、自分が何をしなくてはいけないのか、自分の行動によって他人にどのような迷惑がかかるのか、他人が困っているときに何をしてあげられるのかなどを考えることで、将来、思いやりのある強くて優しい心を持った人間になることができると考える。

オープンスペースでの保育では、クラスごとに行う音楽遊びや絵本の読み聞かせ、造形活動、各行事の練習など様々な指導を行うことになるが、一番不安視されていたことは、音の問題をいかにコントロールし解決ができるのかであった。人間の耳は、訓練することにより様々な雑音がある環境の中にも、聞きたい音だけを抽出して聞き取ることができる能力がある。その能力を幼児教育の時から訓練しておくことにより集中力が高まり、周囲のことに対しても心配りができる、強く優しい心が育まれると考える。平面計画上、隣り合わせのクラスよりも90度に振れている対角線上のクラスが干渉の度合いが大きいことがわかった。実際現場では、同時にピアノの音や大きな音が出るような活動をクラス間で調整することで少しでも影響を抑える工夫をしている。

さらにオープンスペースでの教育をスムーズに運営するポイントの一つとして、WC・手洗い・水飲み場など水廻りの動線をそれぞれのクラスに

確保することがあげられる。クラス専用の水廻りスペースを配置することで、極力自分自身での行動を促し、先生は見守りながら生活の基本動作を学ばせていくことが可能になり、自立する心を養い共同生活の大切さも身につけることができる。また、造りつけ家具の詳細寸法は幾度も現場の先生と打合せをし、園児一人分の大きさを正確に把握し機能性を重視した。

職員室の位置は、維持管理や安全性を充実させる上でとても重要なポイントになる。今回は、パティオを核として周囲に保育室を巡らせ、ガラススクリーンにより1、2階の保育室全てが職員室から望むことができる。このことにより、担任の先生に全てを任せるのではなく、緊急の場合、園長やフリーの先生がサポートし易い環境を整えることが可能である。したがって、子供たちは自由に自分の居場所を見つけ遊びを工夫しながら、四季を通じて楽しく安全な園生活を送ることができる。



また、玄関に入るとパティオを通し保育室が望めるため、保護者も子どもたちの元気に遊んでいる姿や、様々な活動の様子を見ながら自然に保育観察できる。開かれた教育環境はオープンスペースならではのメリットであり、園と家庭の信頼関係をより強いものへと導く。

2001年に起きた大阪教育大学付属池田小学校のいたましい事件以来、開かれた教育環境を確立することが非常に難しい状況になってしまった。子どもたちが朝学校や幼稚園に行って帰宅するまで、親は無関心ということではなく、いつでも、どのような場面であったとしても、自分の子ども

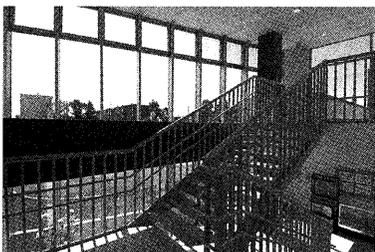
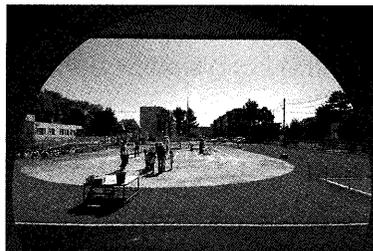
たちの教育環境には常に関心を持ち、日々成長している子供たちの自然な姿を垣間見ることが可能な教育環境が今後の現場には特に求められると考えるが、今回のプロジェクトではそれを実現可能にしたのである。

遊戯室は子供たちが一番安全で活発に活動できる大きな空間であるが、平面計画上、当園の教育の特徴でもある水泳指導を行う室内プールを1階に配置する必要があるが、結果として2階に上げざるを得なかった。

したがって2階の動線も1階と同様にパティオの上部に回遊できるオープンスペース、廊下、テラスを連続させ1階との一体感を持たせ立体的に空間を構成し、園全体の機能性をコンパクトに集約化することにより管理機能の低下を補い子供の安全性を確保した。1～2階を自由に行き来させるといふより、自由に行き来しなくなる空間をしかけることにより、子供たちの遊び心が刺激され、色々な工夫により行動範囲を限りなく広げられる。2階オープンスペースのガラススクリーンは、安全性を優先に床から80cmはパネル構造とし衝突防止に対応した。2階保育室は6才児であるためパネル上部からパティオをのぞき見ることは可能である。しかし、4、5才児は身長が低いパティオでの状況を確認することができない。そこで、パネルの一部をガラスとし、年少の子どもたちでも確認できるような工夫をしている。また、階段での上下移動が多くなるため、階段の構造については細心の注意をはらい、幾度となく現場の先生と手摺の高さや、手摺子のピッチ、メイン階段のけ込みをオープンにするための安全寸法などの議論を繰り返し決定した。

オープンスペースとパティオとの関係は一体感を持たすことで、子どもたちも先生方にとっても、より楽しい空間がひろがりを見せたが、グラウンドとの関係も大切な要因の一つにあげられる。敷地前面（南面）にグラウンドを配置したこともあり、園舎との関係が分離しがちになってしまうが、玄関以外の動線として、外部での砂遊びやブランコや鉄棒など遊具での外遊びをしたあとの汚れを洗い流す水廻り空間とパティオを直接結ぶ動線を確保することにより、外から内の外、内の内へと余韻を残しながら、

内部空間へと導かれ、気持ちもクールダウンしながら次の活動へとスムーズにスイッチの切り替えがきくよう配慮した。



5. オープンスペースでの教育環境の今後

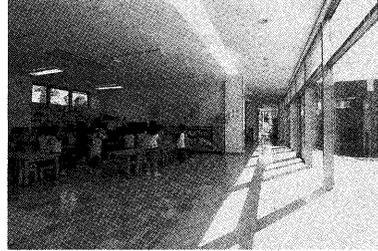
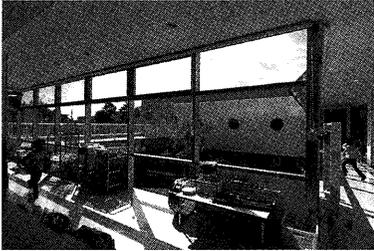
オープンプラスシステムの導入に関しては計画当初、当然のことながら賛否両論はあったが、解決できないような大きな問題（ピアノの音の問題は当初あったが工夫により解消）もなく、先生や子どもたちも柔軟に対応してくれている。ハード面の対応だけでは100%を望むのは難しく、ユーザー側の工夫で助けられることがあることも事実である。

子どもたちは、限りない可能性を秘めた宝であることは言うまでもないが、その可能性を導き出すのは、大人の使命でもある。

今回、オープンスペースシステムを必然性の中から導き出し提案し実現へと結びついたが、ここから巣立っていく子供たちが、いつか大人になってここを訪れたときに、どのような人間になっているのかがとても楽しみである。その未来の訪問者が、オープンスペースでの教育環境が正しい方

向だったのか否かの答えを運んでくるのであろう。

パティオにはシンボルツリーのハウチワ楓が子どもたちを毎日見守っている。四季を通して子供たちはこの樹を見上げ、共に成長しながら心も体も健やかに成長していくことをいつまでも願っている。



注

- i 主に冬などで、窓ガラスなどの冷壁面で冷やされた空気が室内を下降し、足元を駆け抜ける現象のこと。

Ⅲ. オープンスペース園舎における保育の取り組み

－教師の保育に対する意識の変化と子どもの育ち

目良佐都美

1. 新園舎に移行して

2009年3月、38年間の歴史をもつ旧園舎に別れを告げ、中庭を中心とした仕切りのないオープンスペースの新園舎での生活がスタートした。

玄関に入ると中庭に面している壁はすべてガラス張りであるため、全保育室が一望できる環境である。登園時の玄関では「～組さんにはまだ誰も来ていない。僕が1番だね。」また保育室では「～ちゃんが来たよ。あれ、泣いている。どうしたんだろう。」という声が聞こえるほど見渡しがよい。

新園舎建築にあたり、明るく開放的な空間で、子どもたちが自由に活動でき、さらに人と関わる力を養う環境を提供できる園舎を造りたいという願いから、保育室の設計にオープンスペースを取り入れることになった。

1階には年少2クラス、年中2クラスが、2階は年長2クラスとプレイルーム（フリースペース）が中庭に面して配置されている。1階は各部屋から中庭へ自由に行き来できる。中庭はゴムチップが張り詰められており、中靴のまま気軽に外に行くことが出来るため、常にたくさんの友達と出会い、遊べるスペースとなっている。また、集会の場として全園児が集うことも可能で、輪になって互いの顔を見ながら歌を歌ったり、体操をすることもできる。

2階のプレイルームは多目的に利用することができるスペースで、保育室から遊びがつながり、この部屋でダイナミックに保育が展開されている。

第Ⅲ章では、オープンスペースという環境で、子どもたちが、生き生きと活動に取り組み、クラスの枠を越えて異年齢の友達に親しみ、思いやりの気持ちや、互いの信頼関係を築くための、教師の指導上のポイントについて考察したい。

2. 本園の教育の特色

1) 教育目標

- ◎明るく 元気に 遊べる子ども
- ◎良く聞き 考え 工夫する子ども
- ◎みんな仲良く 助け合う子ども

2) 具体目標

- ①基本的な生活習慣・態度を身につけ、健康で安全な生活ができる。
- ②自ら環境に働きかけ、遊びへの興味・関心を広げると共に友達との交流を深める。
- ③集団の中で素直に自己を表現し明るく元気に活動する。
- ④多くの友達や教師との触れ合いを通して、自立と協力、道徳性の体験をする。
- ⑤身近な事象の多くの体験から、豊かな感性を身につける。

3) 保育時間の設定

7:30	8:45	9:00		10:30	11:45	12:30	14:00	18:30
預かり 保育	登 園	自由遊び (おひさま時間)	設定保育	昼 食	自由遊び	コース別 集団降園	預かり 保育	

4) 自由遊び「おひさま時間」

①設定理由

好奇心に満ちあふれ、時を忘れて遊びに熱中するのが子ども本来の姿である。子どもの主体的な生活の中心に遊びがある。子ども自ら遊びを選び、仲間と工夫しながら活動を広げていく。挫折や葛藤、自信や充実感を経験し、友達の心情に気づきながら、子どもたちは互いに育ち合うものである。

本園では、登園後の1時間の自由時間を中心に、子どもの主体性を培

い、「育ち合い」を促進する環境作りと望ましい援助のあり方の実践を重ねている。

②「おひさま時間」の基本的な考え方〈活動内容〉

登園後の正味1時間を「おひさま時間」と呼び、以下の活動を実施している。

- (ア) 自由選択 — 子どもたちが自主的にコーナーを選び、素材、材料、用具、遊具などを使って主体的に活動し遊びに熱中する。
- (イ) 自由交流 — クラス、年齢の枠を越えて楽しく遊び、互いに刺激を受けながら交流する。
- (ウ) 屋外遊びのすすめ — 日光、水、土や砂、草花や虫、雪や氷等自然の素材に親しみながら積極的に屋外で遊ぶ。

③目指す子どもの姿

- (ア) クラスの枠を越えて異年齢児とも違和感なく自然な交流ができる。
- (イ) おひさま時間での活動が自信となり、設定保育や行事でも自分の思いや考えを話すことができ、主体的に活動に取り組むことができる。
- (ウ) 担任教師以外の教師との交流が増え、親密さ、信頼関係が深まり情緒の安定が図られる。

3. めいほう幼稚園の教育方針からみた「旧園舎」での保育の課題

1) 見えない「子どもの様子」

旧園舎の保育室は1階に2クラス、2階に2クラス、別棟2階に1クラスの5クラス編成で、壁には窓がなく、唯一室内から保育室内を見ることができるのは1枚のドアが開いたとき、という構造であった。

一度ドアが閉まってしまうと、保育室でどのようなことが行われているか

は見えず、保護者が訪ねてきても、保育室のドアを開けて良いものかと躊躇する場面が見られた。

閉鎖的な環境で学級王国が作られないよう、教師間での話し合いを十分に持つよう努力していたが、互いの様子が見えないことで、同じ保育を行っていても内容に差が感じられ、互いの保育に関心を持たなくなる傾向があった。保育室内の様子が見えるようにドアの上部に大きな窓を造る改修工事後は、保育室の様子が見えるようになったが、ドアに人が立つ度に、「～ちゃんのお母さんが来ている。」「～先生だ。」とそちらに気をとられ、保育に集中できない状態になっていた。

2) 屋内実施時の閉鎖的な自由遊び「おひさま時間」

当園の保育の中核である、自由遊び「おひさま時間」は、自然の素材に親しむこと、幼児期には発達刺激として活発な遊びは欠かせないこと、子どもは体を思いきり動かし発散することが必要であることを踏まえ、夏も冬も可能な限り、屋外遊びを中心に行っていた。

しかし、天候が悪い日は屋内での活動にならざるを得ず、広いグラウンドでのコーナー活動と違い、一目でどこに何があるか、友達がどんな遊びをしているかを把握しづらかった。そのため、園内をうろうろ歩き回るだけで遊びに集中できず、時間が過ぎてしまう子どもがいたり、コーナーで遊びが盛り上がりながらも、隣のクラスのコーナーと遊びが繋がらず、発展しにくい状況で、どのように改善すべきかを悩んでいた。

3) 遊びの継続性が困難な環境

遊びの継続性がもたらすメリットは幼児の主体性をより効果的に育むことである。単発的な遊びでは発見できない、自分とは異なる友達の視点や発想に気づき、積極的に取り入れ、試行錯誤しながら自主的に遊びを発展させていくことができるのである。そのためには、遊びが継続できる環境が不可欠であるが、旧園舎では十分なスペースがとれず、それを実行しよ

うとすると、他の活動に支障をきたすため、教師も活動に躊躇せざるを得ず、結果、中途半端な活動となってしまった。

4) 子どもと教師の「育ち合い」の限界

閉鎖的環境のクラスに入ってしまうとその中での絆は深まるものの、小グループの友達関係にとどまり、他のクラス、異年齢児から受ける遊びの刺激が少なくなり、豊かな発想や工夫の深まりが見られない。また交流の機会も少ないとお互いの関心が生まれず、思いやりの気持ちや信頼関係が築きにくいと感じた。自由遊び「おひさま時間」でも、クラス意識が障害となって、交流がスムーズにできるようになるには時間を要した。

一方保育の面でも、話し合いを十分に行い情報交換することで、自分の保育の改善を日々行う努力はしているが、経験年数の浅い教師は、担当クラスの園児の保育を行うので手いっぱいなかなか周りに目を向ける余裕はなく、ベテラン教師はマンネリな保育に陥りがちであった。

子どもたちも教師も自分のクラスの中で展開される活動が中心となり、沢山の人の関わりから生まれる「育ち合い」が不足しているのではないかと感じていた。

4. 新園舎における取り組み

ここで、旧園舎における保育の課題を今一度列挙したい。

- 1) 見えない「子どもの様子」
- 2) 屋内実施時の閉鎖的な自由遊び「おひさま時間」
- 3) 遊びの継続性が困難な環境
- 4) 子どもと教師の「育ち合い」の限界

新園舎においては、上記の四つの点にポイントをおき、保育の組み立てや工夫を行った。

1) 「子どもの様子」が見える

保護者、教師の意識調査では「明るく開放的」と高い評価の新園舎となり一年半が過ぎた。保護者と教師にそれぞれ時期は異なるがアンケート調査を行った（P246～P254の参考資料参照）

①新園舎のイメージと満足度

- ・保護者の新園舎の満足度について

大いに満足、満足している 98%

- ・どの点に満足しているか

明るさ 75%

開放感 75%

以上の結果のように、「明るく開放的」な幼稚園に満足している。特に聞き取り調査では「一步園に足を踏み入れると園生活を過ごす、ありのままの我が子の様子がすぐに目に入ってきて安心である」という声が多数あった。

- ・教師の新園舎の使い心地について

明るく開放的 88%

以上のように、保護者同様の評価をしている。

②開放的な環境下における保育のメリットと保育の力点

- ・すべての教師が保育にメリットがあると答えている

他学級の様子が見えて情報交換しやすい 75%

異年齢クラスの交流が活発にできる 75%

以上のように、旧園舎で教師が抱える課題が改善されているという回答があった。

- ・教師が意識して行っている保育活動について

遊び 88%

同年齢クラスの交流 88%

異年齢交流 75%

子どもの生活そのものである「遊び」と「同年齢クラス、他学年との交流」に保育の力点を置いていることがうかがわれる。

・教師が感じる園児の様子について

明るく伸び伸びと活動している 100%

遊びがダイナミックになった 88%

子どもが生き生きと活動している様子がわかる。

・保護者は新園舎になって子どもの変化を感じているか

変化あり 32%

変化なし 58%

以上のように、変化ありのパーセンテージが少ないが、旧園舎の環境を知らない2009年度新入園児が園児の50%を占めていることを考えると「変化あり」が少ない数値ではないと考える。

・特に、どの点に変化があったか

友達関係 76%

子どもが他のクラスに遊びに行った、他の年齢の友達と遊ぶことが多い、他クラスの話をするという声が多かった。

③開放的環境下における保育のデメリット

・教師が感じる保育のデメリットについて

隣の保育室の音が聞こえて気になる 88%

様々な音について、問題点を感じている。

保護者のアンケートの「その他の意見」の中にも少数ではあるが

参観日に隣のクラスの声や音が気になる

以上のような意見があった。

教師の感じる保育のデメリットの少数意見として、「園児に落ち着きがない」「集中力に欠ける」「出歩く」という問題は、年少を担当している教師が感じている。このデメリットは、逆に言うと園児の「集中力」を養う効果ともなる。入園間もない時期に落ち着きがなかった園児も、高学年に

なるにつれ、部屋の前を色々な人が横切っても、気にすることなく、遊びに集中できるようになっていく。音の問題は大人が感じる問題点なのかもしれない。

2) 開放的な室内環境における自由遊び「おひさま時間」の取り組み

新園舎となつての室内での「おひさま時間」の環境設定は特に「異年齢の交流」をねらいとし、活動の反省を行いながら下記のように変化をしていった。

① 園を開放した「おひさま時間」の実施

特に各保育室に特定のコーナーを設置するのではなく、各保育室に普段からある沢山の遊具で自由に遊んだり、空き箱等を利用して製作活動を行うこととした。2階にある遊戯室やプレイルームも開放し、伸び伸びと自由に遊ぶことで沢山の友達と交流できるのではないかと考えた。実際に実施してみると、子どもの動きは活発ではあったが、次々と遊びを変え、ひとつの遊びにじっくりと向き合つて遊び込めていない。

「～ちゃんはどこ？」と友達を探し歩く姿が頻繁にみられる、クラスの仲良しの友達と常に一緒に行動し、他クラスや異年齢児との交流が思いのほか活発に図られていない、片付けの時間になるとさりげなくその場を立ち去り片付けをしない、などの反省があった。

② 異年齢児グループを中心とした「おひさま時間」の実施

①の反省を踏まえ、今度は6つの異年齢のグループを構成し、各保育室を中心として自由遊びを行った。オープンな保育室であるので、互いの行き来を自由にさせた。

コーナーは各保育室で教師が意識して設定する遊具はあるが、その他の遊具で遊ぶことも可とした。

意識的に構成した異年齢で遊ぶことで、年少、中が年長の刺激をうけ、

遊びの幅が広がったものの、隣のクラスとの遊びのつながりや交流が自然にできたのは一部の子どものみにとどまった。また、1階と2階の交流が上手くいかないことや、クラス内に遊びが混在することで、教師の援助が様々なところで必要となり、すべての遊びの広がりがか中途半端となってしまった。

③製作コーナーと遊びコーナーを分離した「おひさま時間」

②の反省から、あえて異年齢グループは作らず、製作コーナーは2階の部屋、1階は自由に遊ぶ空間というように、目的別にフロアを分け設置した。

結果①で行った自由遊びの様子が見られ、2階と1階を行ったり来たりする子どもが多く、さらには各保育室の中にままごと、ブロック、積み木、ゲームが散らばり、落ち着いて遊べる状況ではなくなった。

④「遊び」の自由選択による「おひさま時間」の実施

①～③の反省を踏まえ、開放部屋を1階各保育室と絵本の部屋に限定し「ままごと」「製作」「ブロック」「ゲーム」「積み木」の5つのコーナーを設置し自由選択できる遊び環境を設定した。その結果、自分の興味のある遊びを選択しそこで出会う友達と遊びを広げ、落ち着いて遊び込む姿が見られた。

各部屋で遊びの種類は違うものの積み木で作った家、ブロックで作った家の中に、ままごとコーナーから買い物をしてきたものを持ち込んで遊んだり、製作コーナーで作った物がままごとコーナーで利用されたりと、コーナー同士のつながりが見られ始めた。

【考察】

室内での自由遊び「おひさま時間」の環境構成で重要なことは、互いのコーナーの様子が遊びながら目に入ることである。

屋外でのコーナー遊びと同様に、一目でどこでどんな遊びが展開されているか、友達や教師がどの場所にいるのかということを知ることが子どもの気持ちの安定感を生み、今、自分が取り組んでいる活動に集中できるのである。当園は中庭に面した壁がガラス張りであることで、互いの部屋の様子がどこからでもよく見える。この環境は旧園舎での課題を克服できた重要なポイントであると考えます。

オープンスペースになったからこそと意気込み「異年齢の交流」をねらいとして様々な設定を行ってきたが、屋外の状況と同じように考えることが基本であり、オープンスペースはそれが可能な環境であると考えます。

3) 新園舎のスペースを十分に活かした遊びの継続の実践

新園舎のオープンな保育室からつながる中庭やフリースペース（プレイルーム）は、園児の遊びや活動を継続させ、且つダイナミックに展開できるスペースとして大変有効である。そしてそのことが子どもたちの自ら遊びを展開できる主体的な活動を導き出している。

【事例～段ボールで自分の家を作ろう～】

11月末の父母参観日にNHK教育テレビ「つくってあそぼ」の視聴を行い、それを動機づけにして、段ボール箱を基に年長組2クラスの親子がドールハウスの製作を行った。

事前に子どもたちは、自分の思い描く家の見取り図を下書きしてこの日を楽しみに待っていた。

段ボール箱を切り開いて扉や屋根を作り、仕切りを入れて2階を作り、器が出来上がると廃材（空き箱、トイレットペーパーの芯、カップ、ふた等）や色画用紙、折り紙などを利用し、ベット、ソファ、テーブル、テレビ、洗濯機、時計、クリスマスツリーなど様々なインテリアを夢中になって作っていた。スペースシャトル型ハウスや毛糸を利用して動くエレベーターを作る家族等様々な工夫がみられ、製作意欲の高まりを感じた。

製作したい物がたくさんあって達成感が得られない様子だったが、隣の広いプレイルームにそれぞれの家を持ち寄り、地域ごとに色で区分されたスペースに置くとひとつの街が出来上がった。ミニチュアの人形を歩かせて、友達の作った家を見学する中で色々な発見があり、「エレベーターだ」「電気が点いている」「屋根がハートの模様で可愛い」など友達の製作物に興味を示し、自分も同じ物を作ってみたいという思いがわき上がっているようだった。子どもたちの湧きでる発想を大切にしたいと、プレイルームに「段ボールハウスタウン」を設定したまましばらく活動を継続することにした。

翌日からプレイルームと自分の部屋を行ったり来たりしながら、製作活動の続きが始まった。当初はインテリアを熱心に製作していたが、部屋数を増やそうと、もう一箱段ボールを重ねて3階建てにする友達の様子を見て、4階建て5階建てと競って箱を継ぎ足し始めた。

継ぎ足した段ボール箱は車庫や、物置になりその中に入れる、車やロケット、ロボットなども製作し始めた。仲良しの友達と家を合体させる子どももあり、家はどんどん大きくなっていった。

出来上がるとプレイルームに置いて友達と楽しく遊び、そこに置いてある他の作品を見て刺激を受け、さらに製作意欲がわくということが繰り返されていた。

女兒は街の中に公園を作ろうと木や草花、滑り台を作り、飾っていた。「すごいね。これどうやって作ったの。」「ここ押さえていて。」「段ボールがつぶれちゃった。どうしよう。」と友達の作品を認め合い、協力し合い、試行錯誤しながらの遊びは、12月の終業式まで続き、冬休み中は家庭で遊びたいと持ち帰る子、三学期もまだ続きをすると楽しみにしている子がいるなど、活動はさらに続きそうである。

【考察】

一人一箱の大きな段ボール箱を素材として使用し、それを継続して遊ん

だり製作できたことは、部屋からつながるプレイルームというオープンなスペースがあったからこそ実現したと考える。いつも段ボールハウスタウンが子どものたちの目にとまる場所にあり、活動意欲がとぎれなかった。友達の作品や遊びに刺激され、自ら考え作り出す喜びを感じた活動であり、ダイナミックに遊びが展開された。

もちろん、部屋が狭いから、スペースがないからということで遊びが継続しない、主体的に活動できないわけでは決してない。

ただ、それを理由にできないと思い込み、不便に感じたことで、未完成のまま終わることの多かった遊びが変化したことは事実である。教師に行ったアンケートに表れているが、子どもが主体的に遊びを展開できる保育に力点をおくという教師の意識の変化も大きいといえるだろう。

4) 新園舎がもたらした教師の意識変革と育ち合いの保育

保育室がオープンスペースになったことで教師の意識調査からも、「他クラスの様子がよく見えて情報交換できる」ことがメリットにあげられ、また意識的に行っている保育活動の中にも、「同年齢クラスや異年齢クラスとの交流」があげられている。

実際、新園舎になってからの保育のカリキュラムの中には自由遊び「おひさま時間」だけにとどまらず、設定保育でも交流する保育が数多く含まれるようになった。

ごっこ遊び（お化け屋敷、お店屋さん、屋台、忍者等）や伝承遊び、運動遊び、歌・踊りの発表会、TV視聴「つくってあそび」の事後活動等、活動毎に同年齢クラスや異年齢児との交流を図ることで、子どもたちは今まで経験したことのない楽しい活動に参加し、日々新たな発見をしている。交流をするために、保育のスケジュール、内容など教師間で十分に話し合いが行われるようになり、交流するための適切な環境構成が行なわれている。オープンスペースの園舎は多様な環境構成ができる利点がある。

複数クラス合同で保育を行うときも、人数が多いと身動きがとれなかつ

た壁のある旧園舎の保育室とは違い、スペースを十分に利用することで、ゆとりのある遊び場が提供され、教師のアンケートでもあるように「明るく伸び伸びと活動している」子どもの姿が見られる。ゆとりのある環境で、一つひとつの活動にじっくり取り組むことができ、沢山の友達と落ち着いて会話を交わし、幼児同士の関わりの深まりが感じられる。

また、各保育室に面した「中庭」は、子どもにも教師にも、また保護者にとってもすばらしい環境である。クラスのベランダから気軽に外に出ることができることから、「広い場所で伸び伸びと遊びたい」という子どもの欲求をすぐに実現できる環境といえる。「～組さんが面白いものを作っているよ。私も作ってみたい。」「水遊びが楽しそう、僕たちもしよう」窓から見える光景に子どもも教師も刺激を受け、好奇心を持ち、遊びのヒントが生まれ、中庭に出かけていくことで自然な交流が生まれている。

時には、集会の場として、時には製作物を展示する場所として、また昼食会の場所として、様々な用途で活用できる中庭は幼稚園の社交の場である。

このようにして自然にお互いの名前を覚え、顔見知りになった子どもたちは、自由遊び「おひさま時間」の活動中も年長が年少の遊びの欲求を実現させようと面倒をよく見てくれるようになっていく。

教師は他のクラスと合同の保育をしながら、指導法、言葉かけを学び合うことができ、各学年の発達段階や、子ども一人一人の特性を知ることができ、発達課題に即した指導を行う手だてを考えるようになっていく。

5. まとめ

当初、オープンスペースの新園舎の環境で過ごすことは、多少の不安もあった。子どもたちが保育室から飛び出して行くのではないかと、隣から聞こえる音は保育の妨げにならないのだろうか、いつも誰かに見られていることで、子どもも教師も落ち着かないのではないかと。

しかし、その不安はすぐに打ち消され、明るい日差しがさしこむ園舎で

子どもたちは伸び伸びと過ごし適応していった。保護者も子どもたちが保育室で、中庭で活発に活動する姿、時には歌ったり踊ったりする姿、また、姿勢良く椅子に座って教師の話に真剣に耳を傾けている姿など、いつも目にすることができ安心している。

そして教師は、この恵まれた環境で「生きる力」の基礎を培う教育をどのように展開していけばよいのかを日々の課題として保育を行っている。

たとえオープンな環境であっても、教師の保育に対する姿勢が見えない壁を作っているのは、少しの変化も生まれないのである。壁のある保育室から解放され、自己中心的な保育をしていなかったか、教師主導の保育に陥っていなかったか、周囲に目を向け、話し合いを通して保育を見直すところから始まり、現在も進行中である。教師が感じている音の問題も、互いの保育について理解し合い、手だてを考えていくことで解決していけるのではないだろうか。

子どもの自発性を育てる環境をどのように構成するか、いろいろな遊びをどのように導入していけばよいのかを考えたとき、オープンな保育室、中庭やプレイルームは有効な場所であった。この魅力的な環境を生かし自分の考えで判断し自分の意思で行動する主体性を育てるための保育の在り方を考えること、その中で自分の力で課題を乗り越えていく自主性を育てることができるよう、教師は適切な援助をしなければならない。自然に多くの友達と関わりを深めることができるオープンスペースの環境を生かした特色ある保育を、これからも研究課題として取り組んでいきたい。

参考資料 I

【保護者への意識調査】

調査日 平成22年3月

回収率は50%（内旧園舎からの経験者は25%）

◎アンケート結果

1. オープンスペースのイメージは、一言で表現するとどのようなイメージになりますか？

◎明るい(日当たりがよい)	17人
◎開放的自由空間	13人
◎明るくのびのび	3人
◎光がたくさん降り注ぐ暖かな幼稚園	1人
◎近代保育	1人
◎新鮮	1人
◎清潔	1人
◎今風	1人
◎自由	1人
◎開かれた幼稚園	1人
◎バリアフリー	1人
◎現代的幼稚園(自由な感じ。子どもが素のまま生活できる感じ)	1人
◎開放的だけど暗い	1人
◎まさに「オープン」そのもの	1人
◎公園や野原での青空教室の感じ	1人
◎光熱費がかかりそう	1人
◎無記入	1人

2. 新園舎に満足していますか？

(ア) 大いに満足している	21人
(イ) 満足している	31人
(ウ) あまり満足していない	1人

3. 2の質問で(ア)(イ)に○をした方にお聞きます。特にどの点に満足しているかを選択してください。(複数回答可)

(ア) 快適さ	13人
(イ) 広さ	3人
(ウ) 異年齢交流	26人
(エ) 明るさ	40人
(オ) 開放感	41人
(カ) 清潔さ	21人
(キ) その他(内容は無記入)	1人
(ク) 無記入	1人

4. 新園舎に通い始めるようになってから、意欲的に通園するなどお子様の様子に変化が見られましたか？

(ア) 変化があった	17人
(イ) 変化なし	31人
(ウ) 無記入	5人

※新園舎からの入園者は「変化なし」や「無記入」に印をつけている場合が多い。

5. 4の質問で「様子に変化があった」と回答された方にお聞きます。特にどの点で変化が見られましたか？下記の中から選択してください。(複数回答可)

(ア) 遊び	6人
(イ) 友達関係	13人
(ウ) 生活環境	3人
(エ) 先生との関係	4人
(オ) その他 ・ のびのびしている ・ 天気の話が多くなった ・ 違う年代の子の話をする	3人

6. 5の質問で「遊び」を選択された方にお聞きします。

「遊び」にどのような変化が見られたかを具体的にお書きください。

- ◎違うクラスに行って遊ぶ事もあるようです。
- ◎色々な遊びをする。興味を持つことができる。
- ◎雪遊びが楽しになった。製作する物が大きくなった。
- ◎汗だくになるまでお遊戯室で遊んで帰ってくるようになった。
- ◎今まで交流の少なかったクラスとの遊びが増えた。
- ◎同じクラスでない子どもの名前が出るようになった。

7. ご家庭で、お子様が「新しい園舎」について話題にすることはありますか？ どういう事を話題にするのかを具体的にお書きください。

- ◎他のクラスの子ともさんと遊んだ
- ◎オープンスペースになったため、他のクラスのお友達の話題が増えた。(いろんなお部屋で活動できることが楽しいようである。)
- ◎「〇〇組でお弁当食べた」「〇〇組に遊びに行ったよ」など他のクラスの子ともたちとの交流をよく話してくれます。
- ◎他の年齢のお友達と遊ぶ話題が多い。
- ◎自分のクラスでない所に遊びに行ったことを話したりします。
- ◎他の教室の様子を話す。
- ◎自分の保育室から玄関や預かり保育室が見えて面白いと言っていたことがあります。
- ◎ドアがないので他の部屋に遊びに行きやすい。中庭。
- ◎ドアがなく隣のクラスと近く開放感があるということ子ども言葉で表現していました。
- ◎きれいになって嬉しい。広くなったのでおもいきり走れて嬉しそうです。
- ◎見た目(外観)がおしゃれで、きれいで嬉しいと言っています。
- ◎イルカの壁(蓄光・発光クロス)の事「夜」見て見たいと言っていました。
- ◎はじめは、きれいな幼稚園だねと嬉しそうだった。
- ◎旧園舎と変わったところを話したりしていた。

- ◎シンデレラの階段があるということ。
- ◎トイレの大きさや、道具が変わったこと
- ◎「裏に園長先生のトマトがあるんだよ」「真ん中の庭に青虫がいたんだ」「シンデレラの階段のところにおひな様が飾ってあるんだ」「本がたくさんあるんだ」
- ◎中庭でお弁当を食べたこと。
- ◎今は特にないが、移ったときは「お遊戯室が狭い」と不満そうだった。
- ◎話題にしたことがない。

8. 新園舎では、緑が充分であると思いますか？

(ア) 満足している	17人
(イ) 普通	32人
(ウ) 満足していない	4人

9. その他の意見

- ◎芝生も大切ですが、欲を言えばもう少し広いグラウンドが良かったです。
- ◎お遊戯室をもう少し広く造ってほしかった。
- ◎オープンスペースで開放的なのですが、参観日の時など隣の教室の声や音が聞こえてしまい、なんだか雑然とした感じになってしまうのが少し残念。そういう時だけ、何か壁みたいな物で区分すれば。

参考資料Ⅱ

【教員への意識調査】

調査日 平成22年11月

回収率 100%

1. オープンスペース園舎の使い心地はいかがですか？

当てはまるものに○印をつけて下さい。(複数回答可)

(ア) 明るく開放的	7人
(イ) 空間にゆとりがある	5人
(ウ) 中庭での活動が有効的	6人
(エ) 多様な保育活動ができる	4人
(オ) その他	0人

2. オープンスペースの園舎で教師としてご自身が感じるメリットはありますか？

(ア) ある	8人
(イ) ない	0人

3. 2で「ある」に○をつけた方にお尋ねします。どのような点にメリットがありますか。下記の中から選択して下さい。(複数回答可)

(ア) 他学級の様子が見えて情報交換しやすい	6人
(イ) 教師同士が保育技術を学びやすい	4人
(ウ) 見られている意識から良い緊張感が持てる	3人
(エ) 同年齢クラス間のまとまりができた	5人
(オ) 異年齢クラス交流が活発に行える	6人
(カ) 園全体で園児を育てることができる	1人
(キ) その他 ・保育で困った時にヘルプが出しやすい	1人

4. オープンスペースの園舎で教師としてご自身が感じるデメリットはありますか？

(ア) ある	8人
(イ) ない	0人

5. 4で「ある」に○をした方にお尋ねします。どのような点にデメリットがありますか。下記の中から選択して下さい。(複数回答可)

(ア) 開放的なため園児が落ち着かない	2人
(イ) 隣の保育室の音が聞こえて気になる	7人
(ウ) 園児が部屋から出歩いてしまう	1人
(エ) 雑音が多すぎて子どもの集中力がなくなった	2人
(オ) 音の出る保育は他学級に気を使い控えるようになった	3人
(カ) 園児の怪我が多くなった	0人
(キ) 掲示スペースがない	3人
(ク) その他 ・保護者との個人懇談会などの会話が周囲に聞こえる ・保護者会などの会議中に子どもたちの声がきになる	1人

6. オープンスペースでの保育活動で意識して行っていることはありますか。

(ア) ある	8人
(イ) ない	0人

7. 6で「ある」に○をした方にお尋ねします。どのような点を意識して保育を行っていますか? 下記の中から選択して下さい。(複数回答可)

(ア) 遊び	7人
(イ) 友達関係	1人
(ウ) 同年齢クラスの交流	7人
(エ) 異年齢交流	6人
(オ) 教師との関係	0人
(カ) 生活習慣	0人
(キ) その他	0人

8. 7で行っている保育の事例をご記入下さい。

◎空間を広く使うあそび ・カプラや積み木、汽車レールを利用してのびのびと遊ぶ ・紙飛行機など製作物で距離を競う ・ベランダやプレイルームなど広い場所で動きのある遊び、製作は保育室の机でと使い分けをしている	4人
◎自由あそび（おひさま時間）による園全体を使つての自主選択活動	3人
◎園内を利用して宝探し・かくれんぼ	3人
◎共通の遊び（玩具）による体験・刺激	1人
◎スペースを広く使つての製作活動	1人
◎同年齢クラス間合同の朝の会	4人
◎同年齢クラス間での自由遊び ・友達の幅がひろがるように。年度初めはクラス替えの不安も軽減された	3人
◎同年齢クラス間でのお弁当交流	1人
◎同年齢クラス間での行事の練習	1人
◎テレビ視聴などで先に視聴した学年の様子を参考にしたり、材料を分け合ったりしての交流	1人
◎隣のクラスのピアノに合わせて一緒に歌う	1人

9. オープンスペース保育室での園児の様子はいかがですか？下記の中から選択して下さい。（複数回答可）

(ア) 明るく伸び伸びと活動している	8人
(イ) 他のクラスの友達が増えた	2人
(ウ) 遊びがダイナミックになった	7人
(エ) 友達と遊びを工夫したり協力する姿が見られる	4人
(オ) 思いやりの気持ちが持てるようになった	0人
(カ) 子どもの集中力がついた	3人
(キ) 自主的に行動できる	0人
(ク) その他	0人

10. オープンスペースの保育活動で課題に思うことがありましたらご記入下さい。

◎隣のクラスの音を気にしてしまう ・遊びの面では空間を広く使え他のクラスからの刺激もあるが、製作や行事に向けての練習、クラス内での約束事など、真剣に取り組んだり話し合いたい時は周りの音が気になる（教師だけの問題かもしれないが） ・ピアノがなり音が混ざり合う中、歌ったり話す際に子どもたちが集中せず、教師も大きく声を張り上げてしまう。 ・保育参観日や入園、卒園式など大勢の保護者が同時に各保育室に来園する日の対応（ピアノの音や場所）	7人
◎隣のクラスが気になりやすい	1人
◎隣のクラスと時間を合わせて、静と動の活動を使い分ける等教師間での話し合いが必要	3人
◎クラス内では他クラスの音が聞こえてきても集中しているが、集会などの広い空間、大人数では落ち着きがなく友達同士の私語が目立ち集中できない	2人
◎異年齢交流（特に1Fと2F）をもう少し効果的に行う方法を検討する	1人
◎入園当初は部屋から出て行くこともあるので可動式扉があれば便利	1人
◎教師の死角が多いかもしれない	1人

11. オープンスペースの特色を生かして行ってみたい保育活動があればご記入下さい。

◎全園を利用したウォークラリー（スタンプラリー）	2人
◎長い廊下を利用したサーキット	1人
◎全保育室や廊下を利用したあそび ・ドミノ積み木・汽車・車ごっこ・かくれんぼ・クーゲンバーン	4人
◎園舎全体を利用したごっこ遊び（お店屋さんごっこ・デパートごっこ・忍者屋敷・お仕事体験など）	4人

◎一日縦割り保育	2人
◎朝の会、昼食や設定保育（製作、絵画や伝承遊び、テレビ視聴「つくってあそぼ」、宝探し、ゲーム遊びなど）等 ・異年齢でも対応できる保育内容を検討する	2人
◎共同製作（絵巻物・窓絵などつながりのあるもの）	2人

（本学教育学部准教授）

（柳雅人建築設計工房主宰）

（めいほう幼稚園園長）